

再見 上町台地今昔タイムズ

第2回

災禍と祝祭を生きた 若き群像とレガシー

弘本由香里 Hiromoto Yukari

歴史都市・大阪の背骨に当たる上町台地をフィールドに、2013年秋から2024年春にかけて、約10年にわたり20号を編集・発行した「上町台地今昔タイムズ」。過去との対話を通し、現在を見つめ直し、未来へつなぐ歴史実践として、改めて共有したい観点を取り上げてレビューする。

はじめに 災禍と祝祭の両極の間に

前回、本連載第1回では「災害と福祉に見る『共』の知の継承と文化」をテーマに、『上町台地今昔タイムズ』以下、今昔タイムズ「*1」Vol.14・Vol.15から、注目すべきトピックをレビューした。実は、両号で取り上げた災禍の対極に、都市づくりにおける祝祭としての博覧会の歴史がある。今回、本連載第2回では

「災禍と祝祭を生きた若き群像とレガシー」をテーマに、まず今昔タイムズVol.12「上町台地から見はるかす博覧会『百年の計』で築いた大阪とは」(図1)から、喪失と創造の両極の間で形作られてきた博覧会の姿を、時間軸の中に位置付け概観する。そのうえで、当時の文化をリードした新星たちは、災禍と祝祭のはざまで何を生み出し後世に遺していったのか、今昔タイムズVol.13「超時空遺

産」上町台地博覧会時代モダン大阪に煌めいた若き才能たちの光跡」(48頁図3)から再考する。

上町台地は博覧会の集積地、大阪再生の揺り籠

1900年、フランス・パリで開催された第5回万国博覧会は、世紀の変わり目に当たり、20世紀を眺望する博覧会となった。世界各地から約5000万人が来場したという。多くの日本人も訪れ、

うした社会問題の解決を目指して、大阪市は第2次市域拡張を行い(図2)、当時、東京をしのぐ日本最大の都市となり「大大阪」と呼ばれる時代を迎えた。

これに合わせて、健康的で美しい大阪のあるべき都市像を示し、市民と共有していくために、大阪毎日新聞社の主催で「大阪記念博覧会」が、上町台地の天王寺公園と大阪城天守閣跡を会場に開催され

た。本館では大バノラマを中心に「水」「交通」「電化」「キネマ」「社会事業」など27のテーマで、都市・大阪の現状や未来像を示すなど、「大大阪」の理想が掲げられている。47日間の会期中に、両会場に180万人が訪れるほど盛況で、終了後に同博覧会の余剰金をもとに大阪市・関一市長が大阪都市協会を設立。社会調査の実施や、月刊誌『大大阪』の発行など、第一線の知

を集め都市政策を牽引した。また、大阪城天守閣再建の機運も高まり、その後の市民の寄付による再建につながっていった。

大阪大空襲の焼け跡に、復興大博覧会が生まれた

しかし、時代は暗転し、第2次世界大戦へ。戦争末期の1944年12月から翌年8月にかけて、大阪府内では約50回の空襲を受けた。最

新しい都市文明の姿を目の当たりにし、計り知れない衝撃を受けた。

その3年後、1903年に大阪で第5回内国勧業博覧会(以下、内国博)が開催された。これに先立つ1897年、大阪市は第1次市域拡張を行っている。近代的産業都市としての空間的広がりを求めて、接続する町村を編入し、市域は市制施行時の3.7倍に広がった。内国博の会場は、上町台地に位置する天王寺今宮(現在の新世界・天王寺公園辺り)と堺の大浜に設けられた。そして、これを契機に、近世・大坂から近代都市・大阪に生まれ変わるための、新たな骨格づくり、インフラの整備、都市文化の内外への発信が推し進められた。日本の博覧会史上、画期をなしたプロジェクトといってもよい。153日間の会期中の入場者は435万人を超え、全5回の内国博中、最大規模のものとなった。

新たな都市問題の克服へ、大阪記念博覧会開催

第1次市域拡張の後、内国博を経て、日露戦争から第1次世界大戦に至る時勢。大阪では近代工業が大きく発展した。同時に、人口密集や市街地の無秩序な拡大、生活環境の悪化、感染症の流行、新たな貧困層の形成といった都市問題も深刻化していった。こ

も被害が大きかったのは1945年3月13日から14日未明の大空襲で、約4千人が死亡し、約50万人が被災。大阪市街は焦土化した。その焼け跡を舞台に、終戦後の1948年、毎日新聞社主催で、復興大博覧会が開催された。これもまた会場は上町台地で、現在の天王寺区上本町8丁目付近が選ばれた。この博覧会は、終了後に会場がそのまま復興市街地にな

るという画期的な構想だった。焼け野原に、展示館や野外劇場等を建設し、娯楽が乏しいなか、記念館で展示されたテレビジョンや、外国館の進駐軍売店特別出品や、観光館でのアメリカの天然色映画の上映などを求め、入場者数は百数十万人に及んだという。入場券は福引付きで、野外劇場では、漫才・浪曲、歌謡ショーやのど自慢大会も催され、子どもの遊具が並ぶ園や

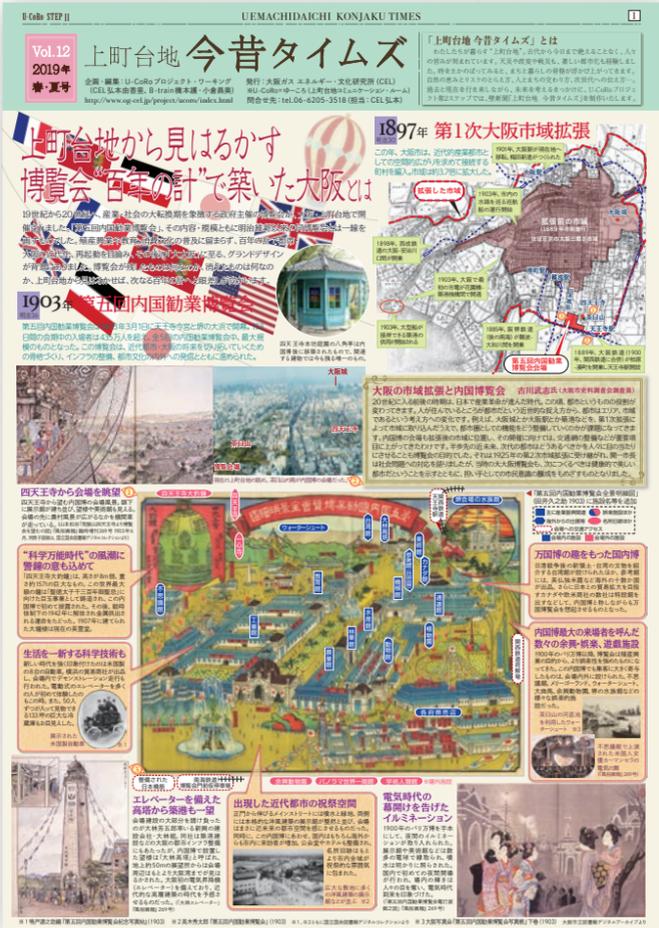


図1 『上町台地今昔タイムズ』Vol.12 (2019年春・夏号) 1面。左の二次元コードから、同紙の1面・2面が閲覧できる。1面には第5回内国勧業博覧会、2面には上町台地の博覧会史を掲載。

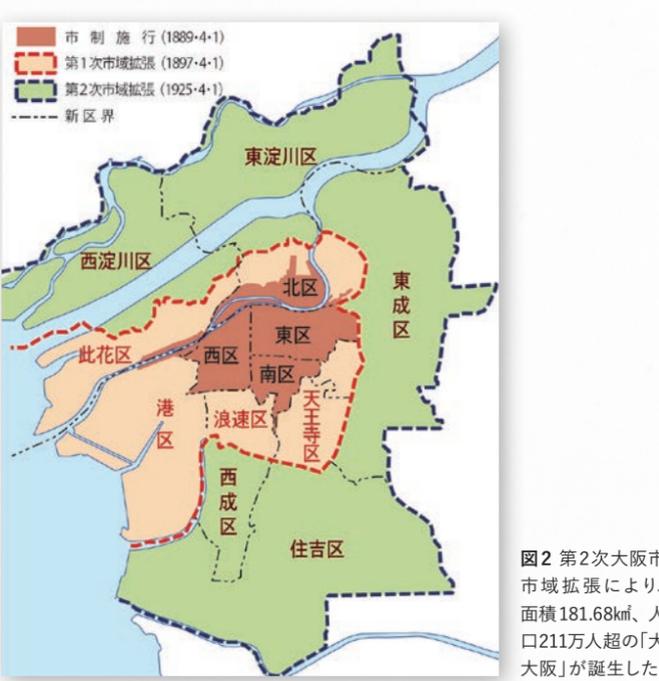


図2 第2次大阪都市域拡張により、面積181.68km²、人口211万人超の「大大阪」が誕生した。



図3 『上町台地 今昔タイムズ』Vol.13 (2019年 秋・冬号) 1面。左の二次元コードから、同紙の1面・2面が閲覧できる。1面には1900年代初頭の、2面には「大大阪」時代前後の人物エピソードを掲載。



図4 1902年1月2日、関西文学同好会新年会の集合写真（『上方』第100号、1939年掲載）。前列左端が金尾種次郎、右隣が南木芳太郎、3列目右端は与謝野鉄幹。

サーカスなども人気を集めた。博覧会後の跡地利用は計画に沿って、いくつかの展示館は、市立文化館や郵便局など、恒久的な施設として活用された。大阪府も博覧会の建造物を買収し、この地域で「夕陽丘母子の街」の計画を推進。京都館・印刷文化館が「モデル母子寮」に、他の展示館が「各種婦人相談所」「モデル健所」「家庭生活科学館」「婦人公職職業補導所」へと生まれ

れ変わり、いくつかは現在の関連施設に受け継がれている。時代を切り拓いた新星たち、希有な群像の点と線

博覧会は、産業・技術の振興、地域の発展、災禍からの復興等を推し進める装置として、20世紀の都市を造形してきた。大阪でも様々な博覧会が行われてきたわけだが、上町台地上や台地の縁辺部での開催数は群を抜き、19世紀末

から20世紀末にかけて、天王寺公園を中心に界限で博覧会と名付けられた行事の開催記録は実に30件ほどに上る。20世紀の曙から始まった、いわば上町台地博覧会時代。災禍と祝祭のはざまで、新たな時代精神を切り拓いていった、モダン大阪の新星・若き才能たちは、どのような点と線で結ばれ、何をよりどころに魂のリリースを繰り広げていったのだろうか。その光跡

をたどってみたい。手掛かりのひとつとなる、一枚の写真がある。郷土研究誌『上方』の第100号（1939年）の巻頭に、同誌の発行人・南木芳太郎が、格別の思いを込めて載せたものだ。撮影されたのは、さかのぼること37年も前、1902年1月2日。当時の関西文学同好会新年会が大阪で開催され、多くの若者が集った際に撮られたものである。

写真の前列左から2番目の人物が、当時20歳の南木芳太郎。その左が、数々の名著の出版を手掛けた、金尾文淵堂の金尾種次郎。3列目の右端には、若き与謝野晶子の才能を見出して世に出す、与謝野鉄幹の姿もある。

時は内国博前夜、若き文学者たちが集った書店

江戸時代以来、大阪・心斎橋筋で主に仏教書を出していた

小さな書店、金尾文淵堂の若主人・金尾種次郎は、1899年、弱冠20歳にして、近代詩を先駆ける薄田泣菫の処女詩集『暮笛集』を出版し、ベストセラーに。口絵を描いたのは、種次郎の幼馴染で、新進画家の赤松麟作。金尾文淵堂は近代文学の出版社として、高い評価を得た。内国博開催前夜に当たるこの頃、文学熱も大いに高まっていった時期で、金尾は文芸誌『ふた葉』や『小天地』も発行。近代文学の若き担い手たちが集うサロンともなった。

晶子は1912年から翌年にかけて『新訳源氏物語』全3巻4冊を上梓する。これはわが国初の現代語訳だった（晩年改めて『新訳源氏物語』を金尾文淵堂から出版）。同1912年、金尾は『畿内見物 大阪之巻』を発行。同書は、作家、画家、木版職人など多分野の才能を集め、編集・印刷技術の粋を尽くした金尾文淵堂の精緻な本づくりの代表作となった。さらに、1919年には『畿内見物』全3巻をまとめ直した『畿内行脚』を発行。当時の文化を牽引した作家や研究者たちが参加している。大阪・関西に根を持ち、東西を股にかける、金尾のバックグラウンドがあつてこそ実現した珠玉の一冊である。

彼は、大阪で開催が決まっていた内国博の企画にも参加し、パリ万博の会場を視察。電気宮、特にロイ・フラアの舞に感銘を受けて、大阪の内国博で、娯楽施設「不思議館」を企画した。後に流行作家・直木三十五となる、植村宗一少年当時12歳が、上町台地にあった実家の店の売り上げをごまかして、「不思議館」で米国人女性・カーマンセラ嬢の「電気の舞」を見に行っただという逸話も残っている。

荒木は、内国博の会場跡地の開発会社顧問にもなり、娯楽地として発展する「新世界」の開発・運営にも参加した。また、後にモダンブズム文学の新星として一躍注目を集める稲垣足穂は、内国博開催当時僅か2歳。大阪・船場に暮らしており、家族とともに会場を訪れたといい、夜間のイ

ルミネーションに感嘆の声を上げ、幼心にモダン都市のイメージを強く感得したという。20年後の1923年、足穂は『二千一秒物語』を発表し、独自のコスモロジーを極めていく。内国博の会場には、美術館も設けられ、芸術家たちを触発した。新進画家・赤松麟作も出品。赤松は22年後の大大阪記念博覧会では、大作の壁画『大阪築城・落城』を描いた。その1年後、1926年には、大阪・心斎橋筋に赤松洋画研究所を開き、後進の育成にも力を注ぐ。門下生には、佐伯祐三の名もある。前述のとおり、赤松麟作は金尾文淵堂の金尾種次郎の幼馴染でもあり、若き日から、洋画家に限らず日本画家や文芸家たち、伝統から前衛まで、分野を横断する交わりを持っていたであろうことも、創造と文化的風土の関係性を捉えるうえで見逃せない要素である。

内国博が開催された1903年、金尾は新しい大阪名所案内の発行を企て、上町台地の名所を紹介した『大阪名勝図会』第1巻を発行するが、売れ行きは捗らず、次第に経営にも行き詰まり、大阪から東京へ拠点を移す。しかし、その後も精力的な出版活動に取り組み、凝った装丁の美本で知られる文芸出版社となる。とりわけ与謝野晶子との関係は深く、代表作の多くが金尾文淵堂から出版された。

冒頭でふれたとおり、1900年のパリ万博が、3年後に大阪で開催された内国博のモデルとなっていることは周知の事実だが、そのパリ万博の会場に、大阪の若き青年実業家・荒木和一が立っていたこ

光跡のリリース、海を越え分野を越えて連なる

おわりに「災禍と祝祭のはざままで真のレガシーを問う」

金尾の依頼を受け、与謝野

若き才能たちの光跡のリリースは、近代化の光と影が交

錯するなかで行われてきた。2025年大阪・関西万博の前に、「レガシー」という言葉が躍るが、21世紀を生きる私たちは、未来に何をリリースすることができるだろうか。

問うとすれば、災禍からのレジリエンス（回復）の糧となるものは何か、それを支える文化的風土の本質とは何かではないか。激変する社会の中で、新たな時代精神を切り拓いた若き才能たちは、今何を語ってくれるだろうか。上町台地から見はるかし、その声に耳を傾けていきたい。

注

*1 『上町台地 今昔タイムズ』のバックナンバーは、大阪ガスネットワーク（株）エネルギー・文化研究所のホームページで公開している。https://www.og-cel.jp/project/ucoro/genre2_konjaku

*2 「四天王寺大約鐘」は、戦時体制下の1942年に解体・金属供出され、失われた。大鐘楼は現在の英霊堂で、大阪市指定文化財。

ひろもと ゆかり
大阪ガスネットワーク（株）エネルギー・文化研究所 住宅建築専門誌「新住宅」編集員等を経て、1992年から大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所（CEL）研究員。歴史・生活・文化の視点から、都市居住やコミュニティの持続的発展につながる情報発信等に取り組む。共著に『大阪新・長屋暮らしのすすめ』、『地域を活かすつながりのデザインー大阪・上町台地の現場から』（ともに創元社）『コミュニティ・デザイン新論』（さいはて社）など。